

2021年12月5日降臨節第2主日説教

バルク書 5章 1-9節

フィリピの信徒への手紙 1章 1-11節

ルカ福音書 3章 1-6節

本日は、降臨節第2主日です。アドベントキャンドルも二本目となりましたが、二本目の意味は、いろいろとあるようです（信仰、平和、愛、ベツレヘムキャンドルなど）。ただし、降臨節の主日は、ABC年に関係なく各主日同じ特祷を用い、第2主日の特祷は、預言者について祈っています。その特祷の関係から言えば本日は、預言者あるいは預言活動について学ぶことが大切であると言えます。キャンドルの意味も預言と言えるかもしれません。

しかしながら、本日の旧約日課は、「バルク書」です。これは旧約39巻の中にはない文書です。ユダヤ教では正典に入りません。「新共同訳」と「聖書協会共同訳」では、「旧約続編」と呼ばれています。聖公会では、カトリック教会の伝統に準じて、礼拝でも読む伝統がありますが、プロテスタント教会では、『聖書』には含まれません。おそらく、1987年に「新共同訳聖書」が出版されて、初めて知った人が多いと思います。もうその「新共同訳聖書」が出版されてから、44年も経過しており、新しい「聖書協会共同訳」も出版されました。しかし、プロテスタント教会では、教義上あるいは信仰告白上、『聖書』は旧約と新約という定義がありますので、「バルク書」が含まれる「続編」はなかなか読まれないようです。

さて、そのような「バルク書」ですが、成立や内容を考えますと少し複雑です。「バルク書」は、全5章からなり、本日の部分はその最後の部分です。バルクという人物は、預言者エレミヤの書記であり、バビロン捕囚の際に活動した人です。バルクが活動した時代は紀元前6世紀ごろでしょう。内容も、そのころのイスラエルの歴史を振り返って語っています。つまり、ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚という歴史的出来事について考察しながら、イスラエルが主なる神様の警告を受け入れなかったこと、そして、主なる神様に立ち返ることの大切さを訴えています。本日の特祷にも、「預言者たちを遣わされました。その警告を心に留め、罪を捨てる恵みをわたしたちに与え」とあります。しかし、「バルク書」は、その際に大切な事柄は、「知恵」と語り、3章と4章は、「知恵」の賛美が続いています。

「バルク書」は、このようにイスラエルの歴史を振り返り、また知恵への言及が多いことから、預言文学ではなく知恵文学に入る文書と言えます。そして、知恵文学が成立したのは、バビロン捕囚よりもかなり後になりますので、「バルク書」は、紀元前2世紀ごろ書かれた文書であり、エレミヤの秘書バルクの名前を用いた文書と考えられます。過去の人物の名前を用いた文書と表現しますと、否定的な感じがします。しかし、過去の出来事をしっかりと歴史化

したからこそ成立した文書であり、その意味において重要な事柄を示しています。つまり神の民のイスラエルの滅び、神の国ともいえるイスラエル王国の滅びという歴史的出来事に、何を見出すのかを、当事者の名前を用いて問いかけているからです。そして、その答えは、「知恵」の大切さである。そう「バルク書」は結論付けているのです。

「バルク書」にある他の箇所について少し触れてみますと、3章38節に次のような言葉があります。「その後、知恵は地上に現れ、人々の間に住んだ」。この言葉の響きは、わたしたちにとってイエス様を連想させます。しかし、「バルク書」が指し示しているのは、もちろんイエス様ではありません。すぐに4章1節では、「知恵は神の命令の書、永遠に続く律法である。これを保つ者は生き、これを捨てる者は死ぬ」と続き、「知恵」の具体的な表れは、「律法」です。「バルク書」において、3章38節では、擬人化された「知恵」とは、「律法」に他ならないのです。つまり、「律法」を熱心に学び、実行し、主なる神様の慈しみと義、すなわち愛に応えること、それがイスラエルの歴史に足りなかった。そのように語っているのです。

それでは、もしイスラエルがそのように「律法」をしっかりと学び、主なる神様の慈しみと義、すなわち愛に誠実に応えるように歩み始めたら何が起こるのか、それはイスラエルの復興であり、エルサレムの復興です。その姿が描かれているのが、本日の5章、「バルク書」の終わりの部分です。本日の箇所には、「(エルサレムよ) 神は天の下のすべての地に、お前の輝きを示される。お前は神から『義の平和、敬神の栄光』と呼ばれ、その名は永遠に残る。」(バルク5:3-4) や「神は自らの慈しみと義をもって栄光の輝きを示し、喜びの中にイスラエルを導かれる」(バルク5:9) と書いてあるのは、「知恵」に基づいて主なる神様に応えた信仰の結果です。「知恵」が具体化した「律法」を通じた信仰の結果に他ならないのです。

さて、「バルク書」が示すような、「律法」を「知恵」として中心に置いて、主なる神様の慈しみと義に応えようとする信仰のあり方は、間違っているのかということそうではありません。今でもそれは正しいあり方です。現在でも、「律法」をしっかりと理解し解釈し、実行し、具体化することは、正しいことです。しかし、困難です。「旧約」における記述を含めて、イスラエルの歴史から知ることができることは、その信仰のあり方の正誤についてではなく、具体化の困難さです。「律法」を実践することとは、不可能ではないのですが、困難であり、また原則的にイスラエルに限定されている事柄なのです。

それゆえ、主なる神様はもっと分かりやすい応答の方法を、イスラエルを超えてすべての人に示された。それがイエス様を通じた信仰です。そしてその新しい信仰のあり方の誕生が、クリスマスに他ならないのです。

本日の福音書は、ルカ福音書の3書1節からです。「皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネ

の領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。」(ルカ 3:1-2)とあります。これらは、ローマという国の皇帝や領主について言及しています。また、イエス様の誕生のお話ではありません。それでは、イエス様が誕生された時の記述はどうであったかとみると、そこには「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。2:3 人々は皆、登録するためにおのこの自分の町へ旅立った。」(ルカ 2:1-3)とあります。時代が異なりますので人物名は異なりますが、ローマという国の皇帝や領主について言及しています。

このように、「ルカによる福音書」は、イエス様の生まれや、バプテスマのヨハネの活動について、その時代に全地中海世界を支配していたローマの皇帝は誰であったか、その時代のどの場所の領主や総督は誰であったかと、ローマの歴史と照らし合わせて物語ります。このようにローマの歴史と照らし合わせて、イエス様について語るのには、四つの福音書の中でも「ルカによる福音書」のみです。その目的は、第一にイエス様の出来事を一般的な世界の歴史の中に位置づけるためです。第二は、イエス様の出来事がその歴史を超える意味があることを示そうとしているからです。つまり、イエス様の出来事は、実際のイスラエルにおいて起こった出来事です。しかし同時に、イスラエルを超えて、また時間と空間を超えて、今も大切な出来事です。それは、イスラエルの神である主なる神様が、イスラエルを超えて、イエス様を通してすべてに人を、救いへ招いておられるからです。

ただし、歴史という概念を用いるにあたって、なぜ「ルカによる福音書」の著者は、ローマを選んだのか、そのような問いも生じます。そして、著者は、ローマ、特に帝政となったローマという体制に、迎合しているのではないかととも問えるのです。しかし、著者がローマを題材としたのは、手段であって目的ではないと思います。著者の意図は、ローマの歴史を正確に記述することが目的ではなく、ローマの出来事を用いて、より多くの人々にイエス様の出来事とは、実際にはいつのどこの出来事であったのかを示すためです。

「ルカによる福音書」は、その時代の『聖書』である「バルク書」が、長いイスラエルの歴史を通して、主なる神様への信仰を記したことと同じように、イエス様の時代の歴史的な事柄を記述することを通して、イエス様を通した主なる神様への信仰を記します。それは、イエス様のご生涯において起こった出来事が、イスラエルの歴史を超えて、当時の地中海世界を支配するローマの歴史をも超えて、今もこれからも、すべての人に開かれており、また大切な主なる神様の救いの出来事であるからです。「ルカによる福音書」は、その救いの出来事は、物語の最初から、つまりイエス様の誕生の出来事から示されていた、イエス様の前に活動した洗礼者ヨハネの預言活動もその一つであった、そのように主張しているのです。

先週は、「希望」について学びました。そしてその「希望」は、わたしたち

が祈り続ける限り、決して消えないことを学びました。本日は、イエス様の出来事とは、ことにその始まりである誕生は、わたしたちにとって「希望」と同時に、「喜び」でもあることを心に刻みたいと思います。「ルカによる福音書」が、主なる神様が「旧約」をとって示しておられた「喜び」、また本日の「旧約日課」である「続編」を通して示しておられた「喜び」が、すべてわたしたちの教会に招かれた人々の「喜び」にもなるからです。

本日の使徒書は、「フィリピの信徒への手紙」です。その冒頭には、「わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。」（フィリピ 1:3-5）。フィリピ書は、パウロが獄中で書いたもので、獄中書間とも言われますが、同時に「喜び」という言葉が多くあり、「喜びの手紙」とも言われています。福音を宣べ伝えるがゆえに、牢獄に入れられたパウロですが、その苦難の中で同時に喜びを語っているのです。苦難の中にあっても、何が本当の喜びであるかを知っているからであり、教会の方々と祈り支え合うことを通して、それを確証しているからです。

先週の使徒書、パウロの「テサロニケの信徒への手紙一」でも「わたしたちは、神の御前で、あなたがたのことで喜びにあふれています。この大きな喜びに対して、どのような感謝を神にささげたらよいでしょうか」とあります（1テサ 3:9）。パウロの最初の手紙であり、また新約聖書の中でももっとも古い文書といわれる、「テサロニケの信徒への手紙一」の中心にも喜びがあるのです。なぜ、喜ぶのか、それは、神様が今も慈しみと正義をもって私たちに臨んでくださっているからです。この世界がどのような世界であっても、神様はこの世界を見捨てたわけではなく、慈しみと正義とをもって、私たちを見て下さっているのです。私たちにとって、その愛に答えることが、この世界に生きていて最大の喜びであるからです。そしてそこから何かを始める時、本当の平和がこの世界に訪れるからです。

今わたしたちは、コロナ禍という世界規模の困難に直面しています。それは歴史的出来事であるといえます。その意味では、わたしたち個人が体験していることも、わたしたちの教会が体験していることも、わたしたち自身の事柄であると同時に、世界にもつながる事柄です。わたしたちの歩みは、世界の人々の歩みにつながっているのです。それは、わたしたちの教会が比較的大きいからではなく、主なる神様が建てられた教会であるからです。しかし、大きい教会ならでは責任もあるともいいます。そうであるがゆえに、わたしたちは、わたしたちの教会を通して、主なる神様がどのような困難があっても、わたしたちを慈しみ導いてくださっていることを、わたしたちの教会独自の方法で示したいと思います。喜びをもって示したいと思います。わたしたちが、わたしたちなりの方法で、今年のクリスマスを喜び祝うことを通して、世界に希望と喜びを示したいと思います。